

序 文

近年、画像診断の進歩は著しく、呼吸器外科領域においてもPET、MRI、3D-CTをはじめとして様々な画像が提供され、それらの画像なしでは手術や周術期管理が成り立たないほどになってきています。

考えてみると、私が医師になりたての頃（1980年代）は、胸部画像診断といえばX線写真フィルムをシャウカステン（Schaukasten）に貼って並べ、顔を近づけて読むというのが基本であり、実用化されたばかりのCTも複数スライス（しかも1cm厚!）を1枚に現像したフィルムを数枚並べて読影していました。まだ胸部断層写真（前額断、矢状断）も必須として撮られており、呼吸器外科医はそれらの画像を読んで頭の中で3D構成を行って手術に臨んでいたわけです。術後管理の画像ももっぱら胸部単純X線でした。このような時期には、画像よりも術中所見などの方がはるかに詳細な情報が得られていました。しかし今や、次々と新しい画像診断モダリティが開発され、さらに画像の閲覧もフィルムではなくPACS（Picture Archiving and Communication Systems）が普及し、例えば肺の微小病変については高精細CTの方が触診を上回る感度であるともいえますし、立体的イメージも3D画像をモニター画面上で容易に見ることができる時代となってきました。

このような画像進歩の中でそれぞれの診断モダリティについての解説書は数多く世に出ていますが、実際の臨床の現場でそれらをどのように駆使して、より精度の高い術前評価を手術に反映させ、適切な周術期管理を行うかについては、成書になっているものはあまりなかったのではないかと思います。実地診療の場では、放射線診断の先生が「あたかも手術所見を知っているかのような」適切なレポートを書いてくださり非常にありがたいと感じられることもあれば、レポート上には現場で知りたい情報への言及は少なく、仕方なく(?)呼吸器外科医が自ら画像診断せざるをえないということもしばしばありました。

そこで、現時点での呼吸器外科臨床に役立つ胸部画像診断のノウハウを、総論からかなりマニアックな各論まで集めて、呼吸器外科医ならびに放射線診断医双方にとって、実際の臨床現場において役立つ解説書を作りたいという趣旨で企画されたのが本書です。

総論では、胸部画像診断のエキスパートである放射線科医の先生方に基本知識を解説していただきました。各論では、呼吸器外科医が普段の臨床で注意しているポイントを解説するとともに、放射線科医からのアドバイスを適宜加えていただくようにしました。逆に呼吸器外科医が何を求めているかなどを放射線診断の先生方にも理解していただけるように、総論のと

ころには呼吸器外科医からのコメントも加えるようにしました。さらに、トピックス的なものは「コラム」として掲載しました。また、紙面では静止画像のみですが、実際の診療の場では3D-CTやMPRなどが活用されてきていますので、QRコード読み取りにてWebサイト上で動画も供覧できるようにいたしました。

なお本書は、臨床でのノウハウを伝承するという意図で記載されており、エビデンスレベルという意味では高くないものも含まれていますが、お気づきの点があれば編者までご一報いただくと幸いです。

本書が呼吸器外科医や放射線診断医の先生方の日常診療のお役に立てば望外の喜びです。最後に、タイトなスケジュールにもかかわらず、多忙な中で執筆いただいた先生方ならびに貴重な症例の画像などをご提供いただきました先生方に心から感謝申し上げます。また、この企画の最初から様々な助言をいただき、進捗を適切にリードしていただきました学研メディカル秀潤社の谷口陽一氏なくしては、本書は世に出せなかったと思います。改めてここに謝意を表します。

令和4年2月吉日

杏林大学医学部呼吸器・甲状腺外科
教授 近藤晴彦

刊行に寄せて

近藤晴彦先生から本書の出版のお話をいただいた時に、画像診断のテキストを呼吸器外科医が書くとういったものになるか、興味が湧いてきたのは事実である。呼吸器外科医をはじめ呼吸器の診療に携わる先生方は、日頃から単純X線やCTなどの“画像の読影”ができなければ診療ができない。毎回毎回、放射線科医に意見を求めているようでは、埒が明かないのは明白である。一方で、自身が読影し診療していくことと、知識を整理してほかの先生方に理解してもらえる画像の解説をすることは全く別物であると思われる。

本書の主旨は、診断がついていないものを画像所見から鑑別を挙げて確定診断に導くといったものではなく、ある程度診断が確定した状況下で、それをどう理解し、診療の中に取り込んでいくかにあると思われる。したがって、呼吸器外科医目線の“画像の読影”にスポットが当てられている。放射線科医の目線は、あくまで画像に写っているものが何か、あるいは正常と異なる所見がないかといった視点が中心で、その周囲の解剖学的所見や術式を考慮した所見などは、私たち放射線科医にとってハードルがまだ高い。本書では、特に術前と術後に分けて解説されていることで、実際の診療経過に即した、かつ疾患ごとに分けられているので、非常にわかりやすいテキストになっている。また、CTなどの画像だけでなく、実際の術所見を並行して提示し、解説されているのも呼吸器外科医ならではの魅力でいっぱいである。

私たち放射線科医は、その前座として画像診断の基礎的な領域を解説させていただいた。個々の疾患の診断に関しての解説は他書に譲るとして、モダリティごとに術前後の画像診断の理解に必要な豆知識をできるだけコンパクトにまとめさせていただいたつもりである。この解説にひととおり目を通した上で、各論に読み進めていただければ、実臨床に即してより理解が進んでいくものと確信している。

副題にあるように、画像診断を究めて手術力を向上させるためのテキストは、これまでにはほとんどなく、若手の呼吸器外科医だけでなく、ベテランの先生方にも知識の再整理としてうってつけのものであると思っている。

最後に、本書の編者としてお誘いいただいた近藤晴彦先生、ご多忙中にもかかわらず執筆をご担当いただいた諸先生方、さらに発刊まで大変ご尽力いただきました学研メディカル秀潤社の谷口陽一編集長に感謝申し上げます。

令和4年2月吉日

千葉大学医学部附属病院画像診断センター

特任教授 遠藤正浩